

◇この議事速報（未定稿）は、正規の会議録が発行されるまでの間、審議の参考に供するための未定稿版で、一般への公開用ではありません。

◇後刻速記録を調査して処置することとされた発言、理事会で協議することとされた発言等は、原発言のまま掲載しています。

◇今後、訂正、削除が行われる場合がありますので、審議の際の引用に当たっては正規の会議録と受け取られることのないようお願いいたします。

○とかしき委員長 質疑の申出がありますので、順次これを許します。長妻昭君。

○長妻委員 立憲民主党、長妻昭でございます。おはようございます。

今日は、お忙しいところ、脇田先生、尾身先生にもお出ましをいただき、ありがとうございます。今、コロナで自宅療養の方が、最新の数字、五月二十六日時点でございますが、全国で二万七千三百五十九名おられる。三月二十四日と比べて約八・五倍の人数でございます。この中には、助かる命が助からなくなる、こういうような方々もおられる可能性は大きいわけでございます。本当にこの厚生労働委員会、しっかりとコロナ対策、生きるか死ぬかの中で取り組んでいかなければならないということ、今日も質問をさせていただきます。

まず、脇田先生に御質問申し上げますが、ちょっと気になる点がございまして、私も東京選出の国会議員でございますので、いろいろなデータ

を見ていますと、東京の夜間、昼間、昼間と夜の滞留人口、人出が明らかに増加している。緊急事態宣言が解除されていないにもかかわらず、明らかに増加しているということなんですが、このままこの傾向が続くとリバウンドするんじゃないかと、私、すごく懸念しているんです。

緊急事態宣言が解除されていない今の段階でもリバウンドが起こるんじゃないかというふうに懸念しているんですが、先生の見解をお聞かせいただけますか。

○脇田政府参考人 お答えいたします。

先日のアドバイザリーボードにおきましても、東京、それから首都圏の三県ですね、いずれもやはり人流の横ばいから増加というところがあるというところで、これが直ちに、現在、感染者数の増加には結びついていない。これは、緊急事態宣言の下で、ある程度人流は下がってきていて、それが少しずつ上がってきているというような状況です。今直ちには結びついておられないわけですが、今直ちに結びついておられないわけですから、やはり委員の中でも、これが今後の感染者数の増加につながるのではないかと、そういう懸念が示されています。

ただ、現在は、実効再生産数、それから感染者数の先週比今週比を見ましても、いずれも一を切っている状況ということですから、今の人流のレベルをなるべく維持をするということが重要だというふうに考えております。

○長妻委員 そうすると、脇田先生は、リバウンドの可能性はないという判断ですか。

○脇田政府参考人 可能性の問題は非常に難しい

とは思いますが、やはり人流の増加が続くようであれば、いずれはリバウンドの可能性もあるというふうに考えております。

○長妻委員 そしてもう一つは、ワクチンで、私も地元を回っていますと、非常に気になるお話を聞きます。一回目接種をした、自治体によっては一回目、二回目とセットで予約する自治体も多くあるんですね、三週間後に。ところが、私が知っている東京二十三区の幾つかの自治体は、ばらばらに予約する。一回目を昨日打ったよ、二回目をまた個別に予約するんだけれども、なかなか電話がつかなくてまだ予約ができていないとか、あるいは一回目の六週間後になっちゃった、あるいは相当時間がたったのにまだ二回目を予約できないんだ、困っているという声を聞くんです。

これは脇田先生にお伺いするんですが、科学的に、ファイザーのワクチンは間隔がどのくらい空くのが最も効果が高いと言えるんですか。

○脇田政府参考人 お答えいたします。

ファイザーのワクチンは、委員のおっしゃるとおり、三週間置きに二回接種をするということになっております。臨床試験におきましても、主には、多くの方はその三週間の間隔で接種を行っているということ、ワクチンの効果については、非常に高い、九五%のワクチン効果があるというふうに証明をされております。

その中で、ただ、臨床試験の中で、四十二日間、約六週間後までの接種間隔を置いた方についても評価をされておまして、これは数が必ずしも多いわけではないかもしれませんが、十分に確立されてい

るわけではありませんが、六週間までであれば一定の有効性は確立をされているということであります。

ただ一方で、どの時点、どの間隔が一番科学的に有効性が高いのかという、まだそういった検証が必ずしも科学的にされているわけではないというふうに承知をしております。

現在、抗体誘導能とか、あるいはワクチンの有効性ですね、発症予防であったりとか、そういう論文が幾つか出てきているという状況でありますけれども、どの時点が一番効果が高いかということとはまだはっきりと申し上げる段階ではないということですので、情報を収集してまいりたいと思っております。

○長妻委員 一番効果が高い間隔はまだ分からない、ただ、六週間というのはある程度、一定の効果があるという答弁でしたので、これは本当に心配されている方から私のところにもいっぱい問合せが来るので、六週間、ぎりぎりなのかどうか分かりませんが、程度ならということなのかもしれません。

では、六週間を超えた場合、これは田村大臣、是非お願いしたいのが、自治体によっても、二回分セットで予約している自治体もある一方で、ばらばらに予約を受け付けている自治体もあって、間隔が相当開いてしまっている自治体もありますので、恐らく、今の話だと、六週間を超えて打つと、せっかくのワクチンがちよつと効果が減退する可能性もあるような答弁だったのでございますが、ちよつと自治体も分からないところがあるの

で、是非これは、せめて、最悪この間隔でない駄目だよというような通知なり指導なりを検討して出すというようなことを、ワクチン担当大臣と連携するんでしょうけれども、検討いただけないでしょうか。

○田村国務大臣 こういうようなお話、もう以前から、これは接種のときからありましたので、もう通知の方は出させていただいております。

あわせて、今般のような御質問もございまして、各地域からいろいろな、そういうお声もありませんので、予約のブース等々を増やしていただくというようなこと、こういうこともお願いしたいという状況、今、こういうときは空いていますよというように、そういうものもお示しをさせていただくなど、いろいろな御工夫はいただいておりますので、そういうものも横展開できるようにしてまいりたいというふうに思います。

○長妻委員 既に通知は出ているんですけども、ここにもファイザー社の新型コロナワクチンの接種間隔についてという厚生省の資料があるんですが、これは分かりにくいんですね。今みたいな話がなかなか明確に書いていないので迷ってしまうわけですので、是非、明確な通知なり周知をお願いしたいと思います。

それでは、脇田先生、ここで結構でございますので、ありがとうございます。

次に、オリンピック、パラリンピックの件で尾身先生に御質問申し上げたいのでございますが、私も地元の方とオンライン等で会議をしております

すと時々聞かれますのは、素朴な疑問をまずちよつと尾身先生にお伺いしたいと思うんですが、自分の娘や息子の運動会が中止になった、でもオリンピックはやる、お父さん、お母さん、これはどうしてなのというような問いが子供からあるというように親御さんから、どう答えればいいんですか、先生はいかが思われますか。

○尾身参考人 委員御質問のオリンピックの運営の方法ですよね。

これについては、もう私は前から申し上げましたように、組織委員会とか政府が決めることであつて、我々専門家はむしろ、開催に伴う、もしやるとなれば、国があるいは組織委員会が決めた場合には、どんなリスクがあるかというのをなるべく専門家として客観的な意見を述べるといのが我々の務めだと思っておりますので、我々のリスク評価をもし政府、組織委員会が聞いていただくんだつたら、そうした中でそういった判断をしていただければと思います。

○長妻委員 ちよつと尾身先生、素朴な疑問を率直に、どういうふうにお答えになるのかということでお伺いしたいんですが、運動会は駄目だけれどもオリンピックはいい、これはどういうふうの説明をすればいいと思われませんか。

○尾身参考人 これは、私は前から申し上げていきますように、オリンピックを仮にやると決めた場合には、そこは、むしろバブルの中じゃなくて、日本の一般の地域での感染のリスクの方がはるかに問題なので、一般の市民の協力が必要なので、

やはり一般の市民が納得できるような形での開催、あるいは市民へのメッセージ、説明というのが大事だと思います。

○長妻委員 ちよつとなかなか、尾身先生もさすがにお答えができていく質問ではないかというふうに、私もなかなか答えづらいですね、そういう方々、親御さんに対して。

尾身先生が昨日の参議院の厚生労働委員会で、オリンピックを開催すれば国内の感染や医療の状況に必ず何らかの影響を及ぼすというようなお話がありました。これはオリンピック、パラリンピックも含めて、それをやる場合、限定的に規模を縮小してあってもやる場合と全くやらない場合では、やはり感染者数というのは違いが出るというふうにお考えでございませうか。

○尾身参考人 私は、先ほど申し上げましたように、国が、組織委員会が仮にやるという決定を行った場合には、これだけの人が来て大きなイベントをやるわけですから、感染のリスクが当然あるわけですね、一定程度。

やるのであれば、感染のリスクは地域においてが多いので、それをどう組織委員会と国が連携してそのリスクを最小限にするかということが恐らく求められるんだと思います。

○長妻委員 これは非常にづらいことなんですけれども、具体的に、オリンピック、パラリンピックを開催したときに、感染が、しないときに比べてどれだけ拡大して、どれだけの方がより多くお亡くなりになるのか。これはみんな触れたくないことだと思うんですが、そういうことも真剣にや

はり議論するときが来ているんじゃないかと私は思うんです。

尾身先生が今おっしゃっていたように、オリンピックを開かない場合と開く場合で、当然開いた場合、感染のリスクがあるということでございますけれども、これは開かない場合、全くやらない場合に比べて、どの程度被害が増えていくのか。相当な範囲をもって予測しないとなかなか予測できないと思うんですが、当然同じということではないわけでございますけれども、そこら辺の、どの程度増加するのかというのは、尾身先生の所感を教えていただければと思います。

○尾身参考人 委員の御質問に答えるのに、それを何か私の気持ちとかそういう個人的な判断で決めるわけにはいかないのです。

専門家としては、今、我々が考えていることは、何人かの独立した研究者に、オリンピックの開催という、これはもう何度も私は申し上げましたように、バブルの中の感染よりも、地域での人の動き、そのことがどのぐらい感染に、何もしない場合、強く国が対策をしっかりと打ってそれに一般市民が協力してくれる場合と、そうでない場合が当然ありますよね。そういう場合にどのぐらい感染が上がる可能性があるということをお示しすることが、実はしっかりと感染対策を打ってもらうための一つの参考になるので。そういうことは、まだ検討中ですけれども、そういうようなスタディーをするのは我々の仕事だと思って、今それを考えているところであります。

○長妻委員 感染が上がる度合いというのはどの

程度なのかがないと対策は打てないというのは、もう全くそのとおりだと思うんですね。これは本当に、リスクとベネフィットを厳密にやはり比較考量して、オリンピックをやる、やらない、これを議論するときがもうとつづくにきていると思っております。

今のお話ですと、大変厳しい話ですけども、オリンピックを全くやらない場合と、限定的、縮小を相当したとしてもやる場合と、やる場合は、組織委員会から発表がありましたけれども、国内で大体三十八万人の方がオリンピック、パラリンピックで集ってくる。集ってくるというのは、無観客であってもという意味ですね。

配付資料の八ページ目にございますけれども、大会関係者の内訳についてということで、オリパラ事務局に作っていたいただきましたが、オリンピック二十五万人、パラリンピック十三万人の計で三十八万人ということが関係者として集うわけでございます。

尾身先生がおっしゃった、市中に、町中に、オリンピックということ、非常に緩んだ空気の中で人が相当増えてくるということも相まって感染が増えるということは、今お認めいただいたわけでございます。

ということ、これは大変厳しい話ですけども、感染でお亡くなりになる方も、オリンピックをやらない場合とやる場合で違う。つまり、オリンピックをやった場合、限定的、縮小的であっても、お亡くなりになる方は増えるわけであるというふうに思います。

では、どれだけ被害が増えた場合は中止で、延期で、このくらいの被害ならやっつけていい、こういうような議論というのは本当にいいのかどうかということも含めて、私は、倫理学者とか哲学者も含めて、疫学の専門家の皆さんも含めて、相当きちっとやはり議論しないといけないというふうに思います。

これは、尾身先生、そういうお亡くなりになる方、どの程度、オリンピックとの相関関係、こういうようなことできちっとやはり議論する必要性というものは、どういうふうにお感じになりますか。

○尾身参考人 先ほど大臣が御指摘した、どのぐらいの人流が増えると感染者が増えるというシミュレーション、私は、それは政府が、あるいは組織委員会が意思決定をする際に非常に参考にはなると思うんですけども、しかし、本当に大事なことは、そういうことを参考にして、今委員がおっしゃるように、仮に感染者がたくさん増えて、そうすると重症化の人も出る可能性がありますよね、そうしたことがないように、今から。

これは、仮にオリンピックを開催するということになれば、当然、一つ、今度は緊急事態宣言の解除ということも、オリンピックとは関係ないけれども事実上タイムテーブルのつてくるわけで、解除をした後どうするのかということも含めて、そういう感染者の増加ということがないような形でしっかりと解除をして、その後の、解除した後の対策もしっかり打つし、一般の市民にどういふような協力をお願いする、それで政府はどういうこ

とを、この間、新たな対策というものも私は必要になってくると思います。

それは、この前も申し上げましたけれども、いろいろなテクノロジーですよね。今は、ただ検査だけじゃなくて、ワクチンじゃなくて、ほかのいろいろなテクノロジーをフルに活用して、そういうことがないようにするということが求められる。何人許容できるかという話は、多分、そこが目的じゃなくて、そういうことが起きないように、もしやるのであれば、しっかりと対策を打つということが大事だと思います。

○長妻委員 尾身先生の後段のところは、努力する、そういうふうに起きないように全力を尽くすというのは当然だと思うんですね。ただ、前段、先ほど尾身先生がおっしゃったように、オリンピックを全く開かない場合と開いた場合で、感染者は増えるわけです、リスクが高くなるとおっしゃいましたから。

つまり、本当に私も、これはてんびんにかけてメリット、デメリットを測れるようなものなのかというふうに感じるんですね。てんびんというのは、感染者が増えて、重症化の方もやらないとに比べて増えて、お亡くなりになる方もどのくらいの程度か分かりませんが増えるというふうな一つのリスク。そしてもう一つは、オリンピック、ベネフィットがあると。今のリスクを上回るベネフィットというのは一体どういうものなのか。今までかけたお金がもったいないとか経済効果が減退するとか、それが命に優先するのかな。てんびんにかけること自体、私はちよつと疑問

にも思うんですが、一体、亡くなる方が増えるということを上回るベネフィットというのは、どういふものがあれば開催、ベネフィットが上回ると尾身先生は思われますか。

○尾身参考人 それは、先ほど申し上げましたように、リスクとベネフィットをどう考えてどう判断するかというのは、前から申し上げているように、私のすべき判断ではない。むしろ、先ほど、亡くなる方が出るのではないかという話、それは、そういうことがないようにするのが恐らくみんなの願いで。

感染のリスクというのは、実は、外から選手や関係者の人が来て、その人との中でやる。あともう一つは、その人と日本人の方と接触があるという部分もある。それから、日本人の方はほとんど接触しないですよ。その三つのパターンがあると思いますけれども、私は、リスクとしては、もうこれは何度も申し上げましたように、選手の中とか選手と一般の人が接触するというよりも、このオリンピックを契機にして日本の中の人々が動くということが、ある程度、これをどうやって抑えていくか、これの方がはるかに大事だ。そのことを是非、組織委員会とそれから政府には御理解を。

どうしてもプレーブックの話に行く、選手のワクチンの話に行く、実は、それは大事ですけれども、それはもうある程度検討されていることです。むしろ問題は、地域における、観戦をすれば喜び、オリンピックというのには特殊なあれですからということ、そうした先生の御懸念のようなこと、もしやるのであればならないように、これは本当

にそこをしつかりやってもらいたいというのが、今のところの、私たちの今の思いであります。

○長妻委員 いや、そういうふうにならないように全力を尽くすというのは当然なんですよね。これはもう誰も異論はないと思いますけれども、特に、尾身先生がおっしゃった後段の町中の緩み、これをどういうふうにもコントロールするのかというのは相当難しいですよ。

それは、そうならないように全力を尽くすということはもちろんですけども、ただ、全力を尽くしても、全くオリンピックを開催しないときよりは感染者は増えるわけですよ、先ほど尾身先生もおっしゃったように。そして、重症化、お亡くなりになる方も増えるわけで、そういうリスクとてんびんにかけるということ自体、私はいかなものかと思いますが、では、ベネフィット、それを上回るベネフィットというのは一体どういうものがあるのか。説得力あるベネフィットがあるのか。

こういうことを、私は、尾身先生がこの委員会でとおっしゃったと思うんですよ。おととい、そもそもオリンピック、今回、こういう状況の中で一体何のためにやるのか、そういうことが明らかになっていないので、このことを私ははっきり明言することが人々の協力を得られるかどうかの非常に重要な観点だと思う、今の状況でやるというのは普通はないとおっしゃっておられて、そのベネフィット、つまり目的ということ尾身先生はおっしゃったんだと思いますし、私も同感なんです。

昨日、記者の方が、加藤官房長官の定例記者会見のときに、尾身先生のこの発言に関連して聞いているんですね、加藤官房長官に。一体、意義と目的は何ですかと。そうしたら、加藤官房長官は三つおっしゃったそうです、報道を見ましたけれども。一つ、スポーツの力、これを日本そして世界に発信する、一つ目ですね。二つ目、震災から復興した姿をお見せすること、三つ目、新型コロナウイルスを克服し、世界規模の課題を解決する能力を示すこと、この三つだとおっしゃっているんです。

私は、これをベネフィットのこちらのてんびんに乗せて感染のリスクを測る、今のこの三つの目的、これがよりベネフィットが重いと到底思えないわけでごさいます、尾身先生が投げかけた何のためにやるのか、目的ですよ、はっきり明言することが重要だということで、加藤官房長官はそういうふうにおっしゃっているんですが、こういう目的、ベネフィットでリスクを上回るというふうには、尾身先生は、問いを投げかけられたお立場として、いかが思われますか。

○尾身参考人 私は、ベネフィットとリスクを判断するというような問題提起は今までしていませんし、むしろ、これは普通に考えて、やはり、やるのであれば、意義ですよ、この開催の意義というものを組織委員会がある程度しっかりと目指す、これは普通の考えですよ。

それについてはいろいろな考えがありますけれども、今御質問ですので、私は、個人としては、スポーツの力ということもそうだと思うし、政府がおっしゃっているような、また、総理は平和の

祭典というようなことも言い、それはいいことだと思えます、平和の方が。そうした政府の考えに加えて、これは加えてですから申し上げますと、仮にやるとすれば、目的は、そうした政府のことに加えて、むしろ、私は個人的には二つのことに目的としては関心があります。

それは選手ですね、大会の関係者、スポンサーとかそういう人じゃなくて、選手の気持ちというのは私は関心があります。それは、これは一年、一回延長したわけですよ。その間、非常に不安定な困難な状況の中で、何とか今までの成果をこらした舞台で示したいという気持ち、それは私は一個人として分かるので、可能であればそうしたチャンスを選手の人に、もう一回延びていますから、という気持ちがあります。

もう一つの私の関心事は、これはもし政府、組織委員会がやるのであれば、感染を、それこそ委員がおっしゃるようなリスクを最小化するということ、主にどういう方法で最小化できるのかという、会議の運営の仕方だと思います。

それは恐らく、仮にオリンピックが始まって、日本の方も外国の方もそれぞれ、ごひいきといいますか、応援する選手がいる。その人がいい成績を出したら、当然そこには感動があり、喜びがあり、ドラマがあるわけですよ、きつとあると思います。今まではその感動のドラマを、会場にみんなが、東京、一九六四年のオリンピックのように、みんなが肩を抱いて、肩をたたき合って大声でというような方法でこの喜びを主に会場内で共有したと思うんですけども、私は、今回はこう

いう状況でありますから、そうした感動、そうしたドラマを、新しいITの技術、通信技術を駆使して、これこそ駆使して、その感動を二方向、日本だけじゃなくて、会場と各国の家庭にいる人と、うまく双方の共有ということを考えて。

実は、こうした感染症はこれで終わるわけじゃありません。これからも何回か来る可能性があるのです、私は、もしやるのであれば、今回のこの大会を契機に、新しい感染症に対する、IT技術を使った方法ですよね、そうしたものをこれからの始まりというかきっかけになれば、そういうことを期待しているというのが、もしやるとしたら、私の個人的な思いです。

○長妻委員 これは尾身先生の方が、専門家の方々が集まって、なるべく早い時期に我々の考えを正式にしかるべきところに表明しようと思っているとおっしゃいましたけれども、それはいつ頃になりそうですか。

○尾身参考人 これは今、私ども専門家の間で考えていますが、政府の方は六月の二十日以降に決められるというふうに私は仄聞していますので、その後だと意味がないですよ。だから、なるべくそれより前に、我々の考えを何らかの形でお伝えできればいいというふうに今考えていますけれども、まだ日には決まっています。

○長妻委員 尾身先生が先ほどもIT技術ということであるおっしゃっていたので、リスクを最小化する。そういう努力は当然やっていたたくし、我々も提言するわけですから、でも、リスクをなくすということではできないと思うんです

よ、努力するというのは当然のことでありますが。私が申し上げているのは、お亡くなりになる方がやらない場合に比べて増える、そのことについて、一体、国会、政府は真摯に向き合って議論しているんだろうかと。あたかもてんびんにかけるような、こういう議論はしていないということでありますけれども、でも、増えるわけですよ。尾身先生に再度聞きますが、全力でいろいろな対策を取っても、では、オリンピックをやる場合と同じ形にリスクを抑え込むということは可能なんですか。

つまり、感染が増えない、やらない場合と同等に抑え込むということは、これは基本的には私は無理だと思えます。リスクの最小化ということもおっしゃっていたいただいたわけで、最小にするのは、それはある程度できるのではないかと思いますけれども、それにしても一定のものが残るし、これは菅総理も、六月一日の委員会でこういうふうにおっしゃっているんですね、国民の命と健康を守るのには私の責務で、五輪開催を優先させることはない。当然だと思えます。

そういう意味では、リスクがある限り、オリンピックをやることで命が失われるわけですから、やらないときに比べて。幾らベネフィットがいろいろあると言っても、それは、開くというのは私にはできないと思います。

私が、尾身先生のお話なども聞き、いろいろな方と議論をして感じますリスク、オリンピックのリスクなんですけれども、五つぐらいあるんじゃないか。五つのリスクの中には、IOCとか組織

委員会が関われない、あるいは視野に入っていないリスクもあるんじゃないかと思うんですね、尾身先生。

一つは、尾身先生も強調していただいているように、オリンピックに伴う町中の緩みですね。オリンピックは七月の二十三日から、パラリンピック、九月の上旬まで続きますので、その間の感染状況を予測してやっつけていかないといけないわけですけれども、オリンピック開会前後、中でも多くの方が繰り出す、人流が増える契機になる可能性がある。

例えば、いろいろな対策で、飲食店の時短などの対策を取ってお願いをしても、ビアホールは満員になってしまったり、あるいは、時短の要請というのはするけれども、なかなか、オリンピックをしているということ、オリンピックをしているのなら少しぐらいはと、こういうようなことをどうやってコントロールするのか。こういうリスクが一つあると思うんです。

これについては、なかなか、IOCとか組織委員会もコントロールの外に今置かれているんじゃないかと思うんですが、この点について、尾身先生、いかが思われますか。

○尾身参考人 私ども専門家でも、地域での感染をなるべくコントロールするには、実は感染対策、そういう部分と、あるいはそれ以上に、私は人々の気持ち、考えというのが非常に重要だと思います。

恐らく、これだけの格別なイベントが起こる場

合には、今委員はお祭り気分とおっしゃっていましたが、今委員は、そういう高揚した気分というのが、恐らく生まれるんだと思うんです。その気分を味わいながら、どうそれが人に感染させないという、ここはもう総論じゃなくて各論に話が行かないという駄目で、その中で、今委員は、その部分は組織委員会はコントロールできないんじゃないかというお話がありましたけれども、そういう部分で、コントロールという言葉はふさわしいかどうか分かりますけれども、組織委員会の人に理解してもらうこと、彼らができることはあるんですね。私はスタジアムの中の感染というものはそれほど心配していかないけれども、スタジアムというか、会場のセレモニーも含めての在り方が実は人々の意識に影響しますから。人々が一生懸命家で、本当は外に出て飲んでみんなと肩を組んで応援したいのを、もしそれを抑えるということが期待されているのであれば、オリンピックの会場で選手と運営に関係ない人がいわゆるお祭り騒ぎのような雰囲気を感じて、そこで感染は起きないですね、ワクチンが打っているから起きない可能性がありますが、テレビで見ると、だから余り感染は、だけれども、そのことを

それこそお祭りというような雰囲気が出た瞬間に、人々は、これは何だと。だから、そういう意味で、私は、人々の意識、理解と共感を地域の人が得ることが非常に重要、そのためには、オリンピック組織委員会の人はできることがあると思います。

○長妻委員 なかなかセレモニーという雰囲気、セレモニーですすから、オリンピック自体がそういう側面がありますから、祭典ですからね。なかなか難しいんじゃないか。

私が考える五つのリスクというのは、これは無観客であっても五つあるということで、無観客でなければもつとリスクがあるということなんです。二番目は、例えば七月末から九月上旬まで、パラリンピック、オリンピックがありますけれども、その間、本当にステージ4になって感染爆発的になったとき、緊急事態宣言とかコロナ対策が機動的に打ち出せるのか、それがゆがみをもたらさないのか、オリンピックによって。

オリンピックに気兼ねして、なかなか政策が明確に科学的にすばつと、平時の、平時というか、オリンピックがないときに比べて打ち出せるのかどうかというのが二番目のリスク、コロナ対策がゆがめられるリスクがあると思うんですが、これについては、尾身先生、いかがですか。

○尾身参考人 私は、これは今の日本の社会にとつて求められて、恐らく多くの人々がそう思っていると思いますけれども、オリンピックの開催にかかわらず、つい最近の大阪のような状況、緊急事態宣言の非常に厳しい状況だった、今も厳しい

ですけれども、ああいう状況を、これはオリンピックがあるがなかるうが、そういうことを再現、もう一回繰り返すことは避けたいと思っていると思うんです。

そういう意味では、実はオリンピックと今回の緊急事態宣言の解除は関係ないわけですよ、本来は、だけれども、もし本当にやるのであれば、実は、今先生おっしゃる通りに、緊急事態宣言の中のオリンピックなんということを絶対に避けるということ、もうある意味では今日からそういうふうなことで、六月の二十日ぐらいに解除するかどうかの判断も、あるいは解除したとしても、しなかったとしても、その後の数か月、ワクチンが多くの人、九月とかその辺ぐらまでの、たまたまもうあと数か月なんです。

この間に何が何でもそういう状況、緊急事態宣言を出すような状況を、あとはもう光が見えていきますから。恐らく重症化は減ります、このワクチンは感染予防もある程度、若い人もだんだん。ただ、急には感染レベルは下げることがはないと思います。だけれども、重症化というのは下げられて、医療の、これまでのしばらくの間何とかしのぐという先に、もう今回は見えているんですね、トネルの先に光が。

そういうことで、私は、これからの解除、あと解除の仕方もそうですけれども、これが実はオリンピックにも、結果的には、やるとしたらそういうことに影響を与えるので。私は、実はそこが一番、オリンピック、オリンピック選手ということにみんな関心が行っているけれども、実は、オリ

ンピックも含めた、地域の感染をどうやって、ワクチンがみんなある程度行き渡るまでにこれをしのか。そのときには、ワクチン以外のテクノロジ、検査もそうだし、それから下水道のウイルス調査やいろいろなテクノロジを駆使して、今まではお願いわが中心だった、もうそういう時代は過ぎて、何とかこれをそういう機会にできればいい。

私は、感染の防衛、オリンピックとは関係なくともかくああいふ状況を避けるための努力を、もう今日から、今までやっているわけですが、更に強くする必要があります。

○長妻委員 委員長、ちよつとうとさされていようですけども、よろしくお願ひします。

三つ目、五輪期間中に都市から地方に、私も地元の方とお話ししていると、オリンピック期間中は地方に行つていようかしら、ちよつと怖いわというようなお話も聞くんですが、都市から地方に避難というか、行く方がかなり増えるんじゃないかという危惧があるんですが、これはいかがですか。

○尾身参考人 人流あるいは接触の機会で感染が増える可能性があるとして申し上げましたけれども、三つのパターンがあつて、先生が今御指摘の、比較的都会の人が、お盆、連休がありますから、これで帰省をする、地方に帰る、このリスクが私は一番強いと思います。したがって、それには、政府の方も、その後リスクがあるということを十分認識して、いろいろな対策あるいは国民へのメッセージということだと。例のパブリックビューイ

ングというのは、またその次のレベルですよね、感染をする。もう一つのリスクは、地方の、開催地以外の人が全国に散らばっている試合場に行くという、三つがありますけれども。

私もは、一番リスクが高いのは、今先生おっしゃった帰省をする、このことはもう分かっていますから、そのことで感染が地方に拡大したというエビデンスがいっぱいあるので、そのことをオリンピック委員会や政府は十分認識しているいろいろな対策を早く明確にさせていただくことが、先生がおっしゃる、いわゆる重症者を防ぐという、オリンピックによって過剰な被害が出ないというようなことには絶対に必要だと思ひます。

○長妻委員 今申し上げた三つというのは、IOCとか組織委員会が、範囲の外、コントロール外、余り気にしていないところだと思ひます。

次の二つ、四番目、五番目は、ある程度対策を取っているんですが、果たして十分できるのかどうかということなんです。

四番目としては、変異株が、九万人程度の外国の方が無観客でも日本に来るときに変異株が入国してしまつて、都民の皆さんなどに感染させる、こういうようなことが起こるリスクがある。これは選手とかコーチについてはある程度厳格かもしれません、PCR検査を毎日やる。それも本当に大丈夫かどうか分かりませんが、特にマスクミとかスポンサー、あるいは政府要人、そういう方々はなかなかコントロールできないわけでございます。そういうところを含めて隙間、穴ができて、世界から変異株が東京にもたらされて、都民の皆

さんに感染する、こういうリスクです。

五番目は、では、その世界から来られた方々がそれぞれ変異株等を感染し合つて、そしてまた世界にお戻りになる、そういうリスクです。世界に拡散する、変異株が。

この五番目については、世界に変異株が拡散するリスクというのは、尾身先生、いかが思われまつか。

○尾身参考人 もうこれは、変異株というのが、また新たな変異株ができるかどうかということは、どれだけ感染者が出るか、つまり、体の中にウイルスが入つて増殖する過程で変異というのが起こるわけですから、その機会をとにかく。変異株について、水際のこととかPCRのモニタリング、ゲノム解析というのは当然やつて、今政府の方にもやっていたいでいるので、それは当然ですけども、それに加えて、とまあ今の変異株はやはり感染力が強いですね、強い。

したがって、この変異株が更にまた新たな変異株に変わるといふことを防ぐためには、とまあワクチン。ワクチンは比較的効きますから。先ほども、何度も申し訳ありませんけれども、ワクチンが行く、九月になるかどうか分かりませんが、けれども、その間とまあかみんなどしのぐという、感染を抑えるということが、いろいろな意味で、私は、求められる。そうすると、変異株の新たな出現、変異株に対する対応もある程度成るので、これが一番、変異株対応の最も重要なことだと私は思ひます。

○長妻委員 いや、尾身先生、リスクを抑える手

法は今おっしゃっていただいたんですが、そういうリスクはあるのかどうか。例えば、医療体制が充実していない国にそういう東京で感染し合った変異株が持ち込まれてしまう、そういうようなりスクというのはありますか。

○尾身参考人 もちろん感染が、海外からも来て、特に世界は、先生御承知のように、多くは発展途上国で、まだワクチンなんかも打たれていない国が多いですよ。そういうところで、人口が多い国だけでもワクチンがまだほとんど打たれていないというところにウイルスが持ち込まれれば、あつという間に広がってという部分があるので。

そういう意味でも、選挙の間での管理というのは重要で、それについてはプレブツクの遵守ということ、今度バージョンスリーというのが出ると思いますが、しっかりとやっていただきたいと思います。

○長妻委員 そして、ちょっと四番目に申し上げたリスクに戻りますけれども、変異株が入国、国内に入ってきて都民に感染させられるのではないかと、このこと、いろいろありますが、これはやはり選手、コーチ以外、なかなかコントロールが届きにくいですね。スポンサーを含めたマスコミ、政府要人、ここら辺は、リスクというのはどういうふうに見ていらつしやいますか。

○尾身参考人 私は、バッハ会長という方が、発言を英語で見ましたけれども、非常にいいことを言っていると思えます。オリンピックのコミニティーのメンバーの方は、エブリバディーと言っていますから、オリンピックコミュニケーション

の全ての人は、これを開催するためということだと思いますけれども、ある程度、英語ではサクリファイアスという言葉を使って、まあ、犠牲というのはちょっと強いですが、ある程度覚悟を持ってやってくださいということで、日本の政府じゃなくて、オリンピック。

これは、私はそれを言葉じゃなくて実際に、ゲームの運営に直接関係ない人の日本への訪問、これは約束しているとかいろいろあると思いますけれども、ここはサクリファイアスすると言っているんですから、非常にすばらしい言葉だと思つて、それをなるべく、できる限り、オリンピックのゲームの運営に直接関係ない人の数はなるべく、増やしていただくというのは、私は期待します。

○長妻委員 いや、その犠牲という言葉の重みが違ふと思うんですね。日本に来るのが来られなくなつちやつた、それを犠牲。ところが、オリンピックをやることによって、お亡くなりになる方が全くやらないときに比べて増えるわけですよ。その犠牲と、語感が日本語と違うのかどうか分かりませんが、同じ、同列にちょっと扱っていただきたくないなと思つています。

最後に尾身先生にお伺いするんですが、ちょっと、こういう意見も結構あるんですね。もう政府がやると言つちやつて、海外から選手も来ちやつているので、やめるとか中止とか言つても無駄だ、そんな議論はもうできないんだから、どうせ止まらないんだから、もうやるしかないんだ、ごちやごちや言わないでやれ、こういう意見も結構あるんですね。これについて、尾身先生はどう思われ

ますか。

○尾身参考人 これは何度も申し上げましたように、政府は、あるいはオリンピック委員会は、しっかりとした、リスクという評価を踏まえた上で判断してもらえばいいということで、それ以上のことは私は申し上げることができません。

○長妻委員 私は本当に、何か非常に、もう決まつちやつていからしようがないなみたいなことが、ちよつとしたことならいいですよ。でも、人の命が懸かっている、総理も口では、国民の命と健康を守るのは私の責務で、五輪開催を優先させることはないとおっしゃっているわけですから。でも、リスクは最小化はできるかもしれません、なくすことはできないわけですよ。やらない場合に比べて、お亡くなりになる方、感染者の数というのは増えるわけですよ。

私は、こういう、日本で非常に曖昧な形で始まつてしまつて大きな問題になるというようないことが絶対あつてはならないと思つていますので、引き続き、いろいろな場所で問題提起をしていきたいと思つております。

今日はどうもありがとうございました。